

俳句時評 言葉の働き

阪西・敦子

俳句の「言葉の働き」に注目した二冊を紹介したい。

一冊目は『俳句がよくわかる文法講座』（文学通信）。日本文学者の井上泰至と俳人の堀切克洋による共著。豊富な例句に即して、文語文法の多彩な時間表現や、かなづかいの背景、口語の効果へ、実践的な解説は及ぶ。

過去の助動詞とされる「き」を使った正岡子規の辞世の句のひとつへ糸瓜咲て痰のつまりし佛かなぐでは「き」の連体

形である「し」が完了に近いことを指摘、その用法は中世にもあることが明かされる。糸瓜の花の頃、痰が詰まったままに死を迎えた仏の姿が「し」によって突き放して描かれる。このように、絶対解を示すのでなく、なぜその表現が選ばれ何を表そうとしたのか、生きた道具としての文法が提示される。

もう一冊は俳人の井上弘美による『俳句劇的添削術』（角川新書）。

句の作者から原句・推敲の過程・推敲

句が示され、それに井上が添削を加える。とはいえ、作者の意図に寄り添い言葉を選ぶ作業は、推敲の続きに近い。俳句の型、表現の選択、視点の選択をもつていかに相手に伝えるか繰り返し説く。

「表現の抑制」というテーマで取り上げた野上卓の句は「羽化急ぐ蟬の空には涯のあり」。蟬の短い一生を空に限りがあると描く。対する添削句は「羽化急ぐ蟬にまさる空のあり」、晴れ渡った空への飛翔を急ぐ蟬の姿が、切実に迫る。

俳句の言葉の構造を示す一冊目と、実作の経緯を示す二冊目、俳句が生まれる過程が見えて興味深い。（俳人）